高学歴女性（女性専門職）の育児行動

岩田　崇（慶応義塾大学）
秋山泰子（　〃　）
井上義朗（東京学芸大学）
深谷和子（　〃　）

(1)　医師と教師という共に子どもの成長，発達を援助する立場の専門職にある女性たちが，自分たちの子育てをどういうふうに行ったか，そしてその結果をどう評価しているかの調査
(2)　高いアスピレーションと専門能力を持った女性を育てた家庭の条件の抽出
(3)　母親不在の育児がどうカバーされ，どう条件が整えられたかの認知

本調査の結果は，現在親準備をしつつある若い層の育児に関する不安に対して何らかの答を与えることになることを期待する。

調査期間：昭和５８年９月～１０月

対象は東京学芸大学同窓会名簿より抽出した女子1,000名と慶応義塾大学医学部，東京女子医科大学，東邦大学医学部各同窓会名簿より抽出した女子臨床医５００名にたいし郵送によるアンケート調査法を用いた。

回答数は女性医師２０５名，女性教師４５５名，合計６６０名で，回答率は４５.５％であった。

表中の数字は凡て％で，（ ）内は女性教師の場合である。

(A)　対象の属性

		女性医師	(女性教師)
(1) 年　令	40才以上	66.9%	(9.3)
	30～39才	31.7	(75.3)
	29才以下	1.5	(15.5)
(2) 現　職	フルタイム	68.8%	(89.5)
	パートタイム	24.8	(6.5)
	専業主婦	4.5	(3.8
	他	2.0	(0.2)
(3) 夫の職業	医　師	76.4%	(0.7)
	教　師	1.5	(42.1)
	専門管理	8.5	(2.0)
	事務職	10.6	(46.1)
	その他	3.0	(9.1)

(B)　サンプルの育った環境

(4)　本人のきょうだい内の位置

長子	55.4%	(44.1)
1人っ子	6.9%	(4.6)
2人	25.5	(25.7)
3人～	67.6	(69.7)

(5)　父親の職業

医　師	55.3%	(0.9)
事務職	17.6	(44.6)
教　師	3.0	(11.3)
専門管理	7.5	(6.9)
商　業	7.0	(13.2)
農　業	1.0	(3.7)
ブルーカラー	0.0	(7.2)
その他	8.5	(12.2)

(6)　(イ)母の職業

職業経験なし	34.3%	(34.0)
あり	65.7	(66.0)

(ロ)母の職業の継続

一貫して働く	59.0%	(31.1)
途中から働く	12.7	(27.7)
途中でやめた	20.1	(27.4)
途中中断	8.2	(13.9)

(ハ)母の職業の継続

医　師	46.2%	(―)
事務職	10.0	(20.8)
教　師	13.1	(21.6)
商　業	12.3	(9.7)
農　業	1.5	(9.7)
技能力	6.2	(18.2)
家業手伝	6.9	(10.4)

内職など	0.8	(5.9)
その他	3.1	(3.7)

(7) 母の望んだ生き方は

家庭と職業の両立	37.9%	(32.2)	58.6
職業に専念	20.7	(12.4)	(44.6)
パート	7.6	(14.1)	
専業主婦	10.1	(18.2)	
?	23.7	(23.4)	

(8) 両親の女性観

(イ)女性が高学歴をもつことについて

	とても賛成	やや賛成	計
父	73.6(48.6)	14.0(22.0)	87.6(70.6)
母	82.6(55.5)	11.3(24.4)	93.9(79.9)

(ロ)女性が専門職につくことに

	とても賛成	やや賛成	計
父	68.6(52.2)	17.3(26.1)	85.9(78.3)
母	75.9(64.5)	16.4(20.9)	92.3(85.4)

(ハ)女性が一生仕事をもつことに

	とても賛成	やや賛成	計
父	60.2(30.1)	22.0(26.7)	82.2(56.8)
母	62.8(44.8)	28.1(27.3)	90.9(72.1)

(C) 本人の生育歴

(9) 保育者

	〈就学前〉	〈小学校時代〉
母親	76.4(89.7)	81.2(94.1)
祖母など	10.6(7.6)	6.3(4.7)
手伝い	12.6(1.3)	12.6(1.2)
保育所	0.5(1.3)	- -

(10) 母親の就労についての本人の感じ方

	当然のこと	わりと自然に受け取る	計
小1, 2年	33.0(20.6)	44.3(46.1)	77.3(66.7)
5, 6年	35.1(20.8)	43.2(38.7)	78.3(59.5)
中学生	40.7(25.5)	38.1(43.8)	78.8(69.3)
大学生	51.8(34.2)	38.4(51.0)	90.2(85.2)

(11) 学校キャリア

	小学校	中学校
公立	80.4(97.6)	46.8(88.9)
国立	10.8(1.8)	16.3(4.9)
私立	8.8(0.6)	36.9(6.2)

高校

公立(Aランク)	44.1	(68.4)
〃 (B以下)	10.9	(23.9)
国立	3.5	(2.0)
私立(Aランク)	30.2	(4.0)
〃 (B以下)	11.4	(1.8)

(12) 成績

小学校卒業の頃	トップクラス	72.3	(63.5)
高3	〃	〃	34.8	(16.7)

(13) 小学校5，6年の頃のタイプ

(とても，ややを含めて)

リーダー格	64.0	(61.7)
負けず嫌い	70.5	(68.2)
理数系	64.2	(46.9)
努力型	61.4	(51.5)
女らしい	24.8	(24.0)

(14) 入学した大学について

一番入りたかった大学	62.6	(51.9)
現役	76.2	(81.7)
浪人恐れず志望校受験	59.6	(40.0)
(両親は浪人を)		
絶対ダメ	24.1	(47.2)
やむをえない	46.2	(41.5)
浪人しても目的達せよ	29.7	(11.3)

(D) 女性専門職の育児行動

(15) 子どもの出生と仕事

結婚してやめた	5.8	15.7
出産してやめた	9.9	
パートに切り換え	22.0	
継続した	57.6	
その他	4.7	

(16) 夫の協力

○第1子の時仕事を続けることに

賛成	51.6	77.1
まあ賛成	25.5	

○第1子の時の家事協力

すすんで協力	15.7	58.9
まあ協力	43.2	

第1子の時の育児協力

まあ協力	67.5
多忙で非協力	26.7
非協力	5.8

(17) 栄養（第1子）

ずっと母乳	4.3（13.6）
途中まで母乳	44.7（42.7）
ずっと混合	18.6（24.7）
人　工	32.4（19.0）

(18) 母乳の効用についての意見

母乳を与えたかったか	
母乳にこだわらぬ	15.1（ 3.8）
できれば母乳を	55.7（39.7）
何とかして母乳で育てたかった	29.2（56.4）
母乳の効用	
栄養学上	57.6（71.1）
免疫学上	78.8（78.9）
スキンシップ上	81.8（76.7）
経 済 性	12.1（17.8）

(19) 子どもの保育パターン

（第1子）

保 育 所	21.9（48.8）	33.2（75.7）
保育所＋祖母	11.3（26.9）	
祖　母	18.3（18.0）	
お手伝いなど	21.3（ 2.1）	
自　分	22.5（ 3.7）	
そ の 他	4.4（ 0.5）	

(20) 子どもとの接触（小学生の頃の平日）

(イ)

〈母親〉	朝 食	夕 食
いつも一緒	81.0（84.5）	68.0（85.0）
週5～6日一緒	5.0（ 3.7）	19.1（ 9.6）
半　分	3.9（ 2.1）	8.4（ 4.6）
たまに	5.0（ 5.3）	3.9（ 0.8）
ほとんど別	5.0（ 4.1）	0.6（ － ）
〈父親〉		
いつも一緒	36.2（60.9）	15.4（26.1）
週5～6日一緒	16.9（ 7.6）	20.0（23.1）
半　分	12.4（ 8.4）	24.0（20.6）
たまに	18.1（11.3）	26.9（22.3）
ほとんど別	16.4（11.8）	13.7（ 8.0）

(ロ)子どもとの接触（小学生の頃の日曜・祝日）

	〈母親〉	〈父親〉
いつも家にいた	81.0（84.8）	14.0（20.5）
大ていいた	5.0（ 3.7）	37.1（53.1）
半　々	3.9（ 2.1）	30.3（13.8）
あまりいなかった	5.0（ 5.3）	10.1（ 8.4）
しょっちゅう不在	5.0（ 4.1）	8.4（ 4.2）

(ハ) 子どもとの接触（PTAや遠足）

○幼稚園の頃の遠足のつきそい

仕事を休んでも行った	34.2（34.2）
都合がつけば行った	48.3（47.8）
殆んど行かず	17.4（18.0）

○小学校の参観日

仕事を休んで	28.7（17.3）
都合がつけば	67.1（78.4）
殆んど行かず	4.0（ 7.9）

(21) 子どもの小学校

	第1子	第2子	第3子
公立	63.7（94.6）	64.9（99.2）	65.8（100.0）
私立	29.8（ 3.4）	27.0（ 0.8）	26.3（－）
国立	6.5（ 2.0）	8.1（－）	7.9（－）

(22) 就学前のけいこごと

	第1子	第2子
させなかった	28.2（70.2）	50.5（83.6）
1種類	35.4（22.4）	22.3（12.1）
2　〃	25.7（ 5.7）	20.4（ 3.5）
3　〃 以上	10.7（ 1.7）	6.8（ 0.8）

(E) 子どもに対する期待

(23) 自分は教育熱心な親か

かなり熱心	11.2（ 3.5）	46.8（28.7）
わりと　〃	35.6（25.2）	
ふつう	34.0（45.8）	
あまり熱心でない	16.0（24.9）	
放任している方	3.2（ 0.5）	

(24) 教育時期

	男子に	女子に
大学院まで	34.3（11.5）	20.4（ 3.9）
大学まで	65.7（85.4）	78.9（87.4）
高校・短大まで	－（ 3.1）	0.7（ 9.4）

(25) 自分の仕事を継がせたいか

	男子に		女子に	
ぜひ	19.4 (1.0)	55.5 (3.3)	14.3 (5.3)	53.6 (19.6)
できれば	36.1 (2.3)		39.3 (14.3)	
どちらでも	42.4 (77.1)		40.0 (69.8)	
あまり望まない	2.1 (14.5)		6.0 (8.3)	
絶対させたくない	- (5.2)		- (2.3)	

(26) 専門職につかせたいか

	男子に		女子に	
ぜひつかせたい	58.0 (26.7)	90.9 (62.7)	48.0 (24.8)	88.5 (48.0)
できれば	32.9 (36.0)		40.5 (43.5)	
とくに望まない	9.1 (37.3		10.1 (26.9)	
主婦でよい			1.4 (4.8)	

(F) 女性専門職の育児観（結論）

(27) 後輩への助言(1)

(イ)子どもが幼ない頃に専門職をもつ女性はどうすべきか

	完全に仕事をやめるべき	少し仕事をへらすべき	保育所にあづけても継続すべき
女性医師	16.2	48.7	35.1
女性教師	23.0	18.5	58.5

後輩への助言(2)

(ロ)集団保育の是否

いい保育所があれば0才からでも可	35.9 (45.1)
1才位からなら可	4.0 (11.0)
2才位 〃	3.5 (6.9)
3才位 〃	24.7 (20.1)
子どもによる	31.8 (16.0)

後輩への助言(3)

(ハ)祖母による育児

保育所や他人よりおばあちゃんに	17.4 (13.8)
おばあちゃんによる	65.8 (57.7)
おばあちゃんより保育所か他人に	16.8 (28.5)

後輩への助言(4)

(ニ)結婚と職業について

結婚後仕事をやめるかパートに	夫に多少負担をかけてもがんばって職業的達成を目ざすべき	結婚相手の選択に際して自分の仕事の継続が可能な相手をえらんで職業的達成を目ざすべき
8.6	24.9	66.5
5.5	40.0	54.5

(28) 自分の子育ての成否（第1子）

非常にすぐれている＋まあ秀れている＝計

体格	13.6（ 2.0）	41.8（31.3）	55.4（32.3）
学力	16.8（ 4.0）	46.9（40.9）	63.7（44.9）
体力	18.7（ 7.6）	30.2（31.4）	48.9（39.0）
健康	31.7（18.7）	30.6（33.6）	63.3（52.3）

(29) 自分の子育ての成否（トータル）

とてもうまく育った	12.8（ 8.1）	76.6（62.3）
ほぼ 〃	63.8（54.2）	
半分半分	20.2（28.5）	
少し問題がある	2.7（ 8.4）	
かなり 〃	0.5（ 0.8）	

(30) 子の出産後，仕事をやめたいと思ったこと

全く思わなかった	29.3（30.0）	64.9（67.5）
あまり 〃	35.6（37.5）	

許されればいつまで働きたいか

50才位まで	5.5（46.1）
51～60才	42.6（46.6）
70才位まで	51.8（ 7.3）

人生をやり直すとすればどうしたいか

家庭と仕事を絶対両立させたい	64.7（42.3）	88.2（77.5）
できれば両立させたい	23.5（35.2）	

＊前掲の資料番号

データの解説

A）対象の属性

1）女性専門職は夫と同業率が高い (3)*より

2）フルタイム勤務者が多く，強固に仕事を継続している (2)より

B）サンプルの育った環境

1）女性専門職を志向した者には長子が多い（とくに女性医師の場合） (4)より

2）女性医師の父親は医師か事務職で，限られた層から輩出する傾向がある (5)

3）女性専門職の母親は，職業経験者が多い。女性医師の母親には医師が多く（46％）女性教師の母親には教師が多い（22％）(6)

4）女性専門職の両親は，娘にきわめて高い職業期待をもっていた者が多い。(8)
また教師より医師の両親にアスピレーションが高く，父親より母親の方に高い傾向がある。

5）女性専門職の両親は意欲的で知的な人びとが多い。両親とも①意欲的な，②勉強好き，その他父親は③仕事一途の人，母親は③子どもの意志を尊重するタイプ，とあった。

（データ省略）

C）本人の生育歴

1）女性専門職の幼少期は，母親に育てられた者が多く，保育所経験者は少い。(9)

2）働く母親をもった場合，それを自然に受け止めていた者が多かった。それが後日自分も働く母親であり続けた一つの要因となっていることが考えられる。(10)
またその受け止め方は，大学生になると1段と確かなものになる。

3）学校キャリアは，小学生時代はほぼ公立。中学から国立私立進学者が増加する。高校はAランク校が8割。女性教師は公立主義であるのに対し，女性医師は私立や国立のキャリアを持つ者が多い。(11)

4）小学校時代（卒業時）の成績はほとんどトップクラス。(12)

5）小学校5，6年の頃のタイプは，①負けず嫌いで②リーダー格③努力型の，がんばり屋でしっかりした女の子であった。女性医師はこれに④理数系が得意，が加わる。(13)

6）大学は第一志望に現役で合格した者が多い。とくに女性医師の場合，浪人を恐れず，親もその方向に支持的であった。(14)

D）女性専門職の育児行動

1）女性医師の場合，出産後もフルタイムの仕事を継続した者が6割にも達する。(15)
夫も妻の職業継続に支持的で，そのための家事協力，育児協力もかなりしている。(16)

2）はじめから人工栄養で子どもを育てたのは女性医師で3割・女性教師で2割。他は何らかの形でできるだけ母乳を与えている。(17)しかし，「何とかして母乳で育てたかった」とする母乳信奉者は，女性医師で3割に過ぎなかったのに，女性教師では6割近くにも達する。(18)
母乳の効用として挙げられているのは，女性医師はスキンシップと免疫学上の理由を，女性教師はこれに加えて，栄養学上の理由を加

えている。(18)

3) 子どもの保育パターンとしては，女性教師に保育所利用率が高く８割近く。これに対して女性医師は，お手伝いさんや自分（勤務形態を考えて）が行う割合が多く，保育所利用を敬遠する傾向がある。(19)

4) 子どもとの接触にはかなりの努力が払われている。８割以上が毎朝必ず子どもと食事を一緒にとるようにしており，夕食もこれに近い割合で一緒にされている。
しかし，夕食は女性医師の方がやや欠けがちである。これに比べると父親は数値が低く，朝食で３６％，夕食で１５％（女性医師の夫），同じく６１％と２６％（女性教師の夫）しか必ず一緒に食事をとっていない。(20)

5) 日曜祭日も，母親の８割強はたいてい家にいるようにしているが，父親はかなり不在がちである。すなわち女性専門職は，子どもの養育に関しては父親の分まで，母親としてカバーしようと努力をして来た気配が見出される。(20)
　このことは，遠足やＰＴＡなども，何とかして都合をつけて出席している様子についても言えよう。(20)

6) 子どもの通う小学校は，女性教師が公立主義なのに対して，女性医師は３分の１が私立国立へ通わせている。(21)

7) 就学前のけいこごとの有無で，母親の教育熱心かを推定するなら，女性医師に教育熱心度が高い。女性医師の場合，第１子には７割以上が何らかのけいこごとをさせ，第２子でも５割がさせている。女性教師の場合は３割以下である。(22)

(E) 子どもに対する期待

1) すでに見て来たように，女性医師は女性教師より教育熱心な傾向が見出されるが，それは(23)にも見い出される。また子どもへの教育期待も女性医師に高い。とくに大学院修了の期待率は，女性医師の場合，男子に対して３４％女子に２０％の高率である。女性教師はやや期待率が低い（１２％と４％）(24)

2) 自分の職業を継がせたい（同業にしたい）とする者は，女性医師に高く，男子女子ともに５割に達する。これに対して女性教師は（同じく３％，２０％と）後継ぎをあまり望まない。(25)

3) 子どもに専門職につくことを望む者は，女性医師の場合ほぼ９割と圧倒的であるが，女性教師の場合はややおちて，男子に６割，女子に５割となる。(26)

(F) 女性専門職の育児観（結論）

1) （同し大学で同じ道で職業的達成を目ざしている後輩の女子学生に，後輩への助言という形で，これまでの自分の育児経験を総括して，助言を求めたところ）
女性医師はやや保育所による育児に否定的で，$\frac{2}{3}$が子どもが幼ない頃は，仕事をへらすか完全にやめるべきだと結論している。しかし女性教師は，保育所に子どもをあずけても，職業を継続すべきだとする者が多く６割近くに達する。(27)

2) 従って，０才児保育の肯定率は，やはり女性教師に高く４５％（女性医師は３６％）。但し「子どもによる」という肯定のし方は，女性医師の場合３割に達する。(27)

3) 祖母による保育の可否は，多くが「おばあちゃんによる」と回答されている。(27)

4) 働らきながらの育児をふり返えって，「子どもはうまく育ったと思うか」の問いに対して，女性医師の７６％，女性教師の６２％は，「とても・まあ」うまく育った，と答えている(29)

5) 女性専門職は，職業と育児の両立に困難を感じながらも，６～７割は「仕事をやめたい。」とはあまり思うことなく今日を迎えている。とくに女性医師の職業継続意欲は強固で，できれば７０才位までも働きたい，とする者が５割に達する。しかし女性教師の場合は５０才位までが５割，６０才位までが５割と，それほどの意欲は示していない。(30, 31)

6) 「人生をやり直せれば，また仕事をもちたいか」の問いに対しては，女性医師の９割，女性教師の８割近くが，両立を望んでいる。そうした意味で，専門職女性の職業による自己実現の欲求はきわめて高いとみなされよう。

7) そのための条件として女性専門職は後輩に，自分の体験から出た卒直なアドバイスとして

「結婚相手の選択に際して，自分の仕事の継続が可能な相手を選んで，職業的達成を目ざすべき」（女性医師６７％，女性教師５５％）と述べている。(27)

昭和59年度，60年度研究計画

社会は常に少しづつ変化するものだが，特にこの半世紀の変化には末曽有のものがある。その嵐の中で，変りにくい筈の家庭の変化を余儀なくされ，人びとの生き方や，親子のあり方も，また子育てのスタイルも，少なからぬ変化をとげてみる。

人間が単に生物学的に親になることはいつの世にも容易であるが，現代のような激動に適応する困難な社会の中で子育てを全うしていくには，生物学的親になるまでにそれなりの親準備のための期間が必要と思われる。それは身体的には勿論，心理的にも，社会的にも，親として必要な行動様式を形成していく大切なプロセスである。かかる視点から私共は「親準備性」という概念を提唱し，はじめの３年間で青年の中に形成されている親準備性の調査を行った。そこど見出された問題の１つは現代の青年たち（特に知的エリート層）の中に働く母親による子育てをこれらの女性の新しい生き方として望む一方，母親なき育児に大きな不安を抱いている姿であった。

そこで昭和５８年度に私共（慶大小児科・学芸大児童学チーム）は，女性専門職（女性医師と女性教師）の育児観と実際の育児行動を調査し，この層における育児が母親不在でも可成りの成功をみている様子を見出した。

しかしこれらはあくまでも知的，経済的エリートにおける育児であって，一般的とは無論いいきれない。そこで昭和５９年度以降は，次の様なサンプルに調査対象を拡大し，従来の結果と比較検討することを計画した。

調査Ａ：〈対象〉　低学歴，低階層主婦
　　〈内容〉　女性専門職調査とほぼ同一
　　〈時期〉　昭和５９年後期
調査Ｂ：〈対象〉　女性専門職（医師，教師）
　　〈内容〉　具体的な育児行動の特徴をとらえるために，新たな調査表を作製する。
　　〈時期〉　昭和５９年５月～９月
調査Ｃ：〈対象〉　分べん前後の婦人
　　〈内容〉　親準備性に関する意識調査
　　〈時期〉　昭和５９年～昭和６０年
調査Ｄ：思春期精神遅滞児の母子相互作用調査の継続